語り継ごう、明日へ。

歴史はいつも未来へのみちしるべです
世の中の進むスピードと自分の生きていくペースが
少し合わなくなってきたなと感じ始めたら
いつか来た道まで戻ってみましょう

きょうはいくら売れたの？

マルシェなどと銘打って各地の産物を販売する催し。同じ野菜にしても包み方、いやラッピングにも視覚的に工夫が施されています。東京では豆腐の引き売りをビジネス化した会社が現われました。今どきの若者がリヤカーを引いて、あのプハァーというラッパの音とともに、パック詰めのこだわり豆腐を売り歩いているそうです。懐かしい自転車の豆腐売り。リヤカーより積める量は少なくて結構。売れる分は決まっているからです。奥さんたちは鍋やザルを持って集まり、ひとしきり世間話。考えたこともなかったけれど、売り上げはいくらぐらいだったのかな。

ひと街しごと No.37

・時の街角／旧田村家北誠館蚕種製造所――2
・マチの博物館／陶遊――3
・川筋を行く／創成川㈢――4
・来た道・行く道／石輪硝子店――5
・あるばむレトロポリス／中島子供の国――6
・道具で道草30年――7
・紙の話②――8

二〇一一年 秋（年四回発行）
発行：㈳印刷紙工
札幌市中央区南十五条西十八丁目
TEL（〇一一）五六一―三五九八
編集：ひと街しごと刊行会
札幌市中央区北一条西十七丁目 北海道不動産会館四階
㈲編集工房 海内 TEL（〇一一）六二三―六六五二

時の街角
北海道開拓の村から

養蚕とは言葉では知っていても
実際の工程を見たことのない人が多いでしょう
蚕種製造所では良質のカイコの卵を製造しますが
養蚕の産業遺産としても価値の高い建物です

手間をかけて飼育、カイコの卵を製造。

旧田村家北誠館蚕種製造所
明治三十八年（一九〇五）建築

カイコの繭（まゆ）から生糸を作る養蚕業。日本では江戸時代から明治時代にかけて隆盛期を迎えました。主産地は東北、関東、甲信ですが、北海道では江戸時代末期から本格的な取り組みが行われています。

しかし国内の養蚕は、化繊の普及で戦後は衰退。北海道では開拓に伴って、カイコのエサとなる桑の木が伐採されて少なくなり、新たな植え付けも行われなかったため、産業としての定着は見られませんでした。

開拓の村の資料によりますと、明治四十一年度の支庁別養蚕戸数（春蚕のみ）は、空知支庁の二千六百七十六戸がトップ。それに増毛支庁と室蘭支庁（いずれも当時）が七百戸台で続いています。

旧田村家北誠館蚕種製造所は、明治三十四年（一九〇一）、浦臼村（空知支庁）に移住した高知県人の田村忠誠が同三十八年に完成させたもの。カイコの卵（蚕種）を生産・販売するために、その飼育から産卵までに必要な部屋と設備を備えた、道内唯一のものです。木造平屋一部二階建の切妻・柾ぶき屋根は、構造的には珍しくはありませんが、一連の資料展示に興味深いものがあります。

一階部分は六つの部屋と土間の納屋に分かれています。向かって左端の貯桑室に桑の葉が蓄えられ、その右側の五つの部屋で飼育作業や産卵作業が行われます。蚕種製造には、強くて質の良い親のカイコを育てなければなりませんから温度や湿度、病害虫などに注意が必要です。

脱皮を繰り返しながら成長するカイコがやがて繭を作ると、その繭の端を切り取って中のサナギの雌雄を選別。さらに別の蚕箱に入れて羽が出るのを待って交配させ、粘着性のある台紙（蚕紙）の上に産卵させて出荷します。

田村忠誠の指導により、空知地方は北海道を代表する養蚕地に発展。長男の亦次郎（元浦臼町長）が継承しましたが、昭和二十三年に廃業しています。

正面の細長い廊下の片側に、飼育作業や産卵作業の行われる部屋が6つ
写真中のだ円形の器はカイコの産卵枠。一連の養蚕の過程が興味深い

貯桑室の桑は開拓の村で栽培したもの

旧田村家北誠館蚕種製造所の外観
一部2階建ての切妻・柾ぶき屋根
明治38年（1905）の建築

※参考文献「北海道開拓の村・開村10周年記念誌」

マチの博物館

陶器・和食器の店
陶遊
札幌市中央区南十二条西二十二丁目
一一一 電話(〇一一)五五二一一七四七四
http://www.touyuu.net/

普段使いの陶器に、北海道らしさを求めて。

陶の器とはこんなに温かみのあるものかと改めて実感
それも道内の陶芸作家の作品ばかりです
最初は七人だったのに二年間で三十二人に増えたとは
作家やお客さんと築き上げた信頼関係を物語っています

全国各地にある伝統の窯とは異なる、北海道独自の特徴を持った陶器があるのではないだろうか――こんな動機から梶田敏幸さん(五一)、すみ江さん夫妻が切り盛りする陶器専門店。道内の陶芸作家の作品ばかり集めてユニークです。

二年前、隆香窯(りゅうかがま)(小樽)の上田隆之氏の協力を得てオープンした時は、作家の数はわずか七人。「一つのテーブルに一人の作家。個展を開いているようでした」と敏幸さんは言います。それが現在では三十二人に。中島知之(札幌)、中村二夫(斜里)、吉田南岳(白老)、恵波ひでお(洞爺湖)といった作家たちの作品二千百点が展示販売されています。

上／中島知之の一連の炭化作品
左／吉田南岳のモダンな雰囲気　右／丹念な色付け―ケンタロウ

店に置きたいと思った作品に出合うと、窯元を訪ねては作家とコミュニケーションを深めてきた結果。そして作家とお客さんとで築いてきた信頼関係のあかしでもあります。特に「お客さんから店に置いてほしい作家の要望が出てくるようになった」ことを敏幸さんは喜んでいます。

道内の作家のみということだけでなく、

湯呑み、食器、酒器――すべて道内作家32人の作品

店のもう一つの特徴は「普段使いのものが多い」(敏幸さん)ということです。展覧会的な作品よりも毎日使っているもの、一度使うと良さがわかって何度でも使いたくなるものです。湯呑み、食器、酒器――中でも敏幸さんが一番うれしいのは、ごはん茶碗が売れた時。「ごはん茶碗を作っていない作家はいません」と、使われてこその陶器の魅力を強調します。

右／薪の灰釉が自然な斜里窯
左／赤絵のフリーカップは恵波ひでお

おもに店に出ている奥さんのすみ江さんも「作家さんが一生懸命作っているものを預かって、お客さんに安らぎを与えられることはとてもうれしいことです」と、季節の花を生けるなど店内の演出にも配慮を欠かしません。すみ江さんはホームページのブログの担当でもあり、作家が来店した時や窯元を訪ねた時の様子、さらには身の回りの出来事などを丹念につづっています。

心を込めて販売する梶田すみ江さん

環状通に面した
しゃれた店構え

最近は道外から観光で来た人が、インターネットを見て立ち寄ってくれることも多くなりました。道内作家の作品をぐるっと見て回るだけで、何かを感じてくれることでしょう。敏幸さんの「酒のグレードもあがりますよ」との言葉に、つい酒器に手が伸びました。

ぐるっと見て回るだけで楽しい道内作家の作品群

創成川 三

川筋を行く

人と川の様々なかかわりをたずねて

両岸に塗り込められた物語

製麻工場、亜麻畑の盛衰、鎮守の森は建立百三十年。

どこまで行ってもコンクリートの護岸
緑もなくひたすら真っすぐのまるで用水路
ただ疾走するだけの車のための味気ない道路にも
いろいろな物語が塗り込められていると知らされます

前身が帝国繊維だからテイセンボウル！

この章がJR札幌駅のある北六条あたりから始まるのは、理由のないことではありません。

慶応二年（一八六六）に開削された、創成川の始まりである大友堀は、北六条から北東方向へ流れて伏籠川に合流していました。石狩川―伏籠川―大友堀というルートで、札幌本府建設のための物資を運ぶのが目的です。

麻生球場もかつては亜麻の栽培地だった
麻生の一本松は工場長宅があった目印

ところが札幌本府が建設されると、堀のような規模では間に合いません。そこで明治三年に北六条から麻生まで、同二十六年には麻生から茨戸までの輸送ルートが開かれました。

これが現在の創成川で、歴史的にも北六条から北八条にかけては、交通の要所として早くから賑わった地域なのです。

界隈の歴史を物語るのはまずテイセンです。今なお残るテイセンは、中央郵便局前の大きなボウリングのピンが示すとおりのテイセンボウル。前身は帝国繊維。明治二十年に設立された当初は北海道製麻会社といい、のちに帝国製麻、そして帝国繊維と移り変わります。道内各地で生産された亜麻をここで製品化していたのです。

地域の神社の縁日でこんなに人出がある

ここだけは緑が濃い諏訪神社の鎮守の森
来年で建立百三十年、例大祭は九月十二日

昭和三十八年に閉鎖された赤レンガの工場を知る人はもう年配でしょう。

創成川を一気に北上して麻生町までいくと、一帯はかつてその亜麻が栽培されていたところ。町名の由来でもあります。帝繊の琴似製線工場も今の麻生球場あたりに。

開校明治34年の北九条小学校（右）
北へ進んで北辰中学校も戦後すぐの開校（左）

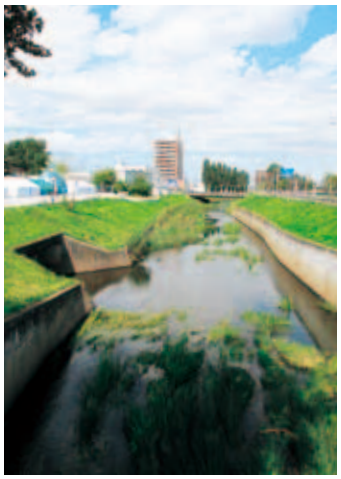
工場長宅があったのが麻生町三丁目。住宅街の真ん中ににょっきりと立っている大きなアカマツが、当時からある目印です。

川沿いの歴史といえば、北十二条東一丁目の諏訪神社も由緒あるもの。鎮守の森というには周囲があまりにも都会化していますが、うっそうとした木々に囲まれて風格十分のたたずまいです。

明治十五年、信濃からの三十人余の入植者が諏訪大社の分霊を祭ったのが始まりで、厄除けや縁結びの御利益があると信仰を集めています。来年で建立百三十年。毎年、九月十二日の例大祭にはたくさんの人出で賑わいます。

そして諏訪神社近くの北九条小学校（北九西一）は、開校が明治三十四年と古く、北へ進んで北辰中学校（北十八西二）が市内で最も歴史のある中学の一つ。またその隣の幌北小学校も昭和九年の開校。都心部の学校の生徒数が減っている中、歴史を刻み続けています。

イベントで賑わっている札幌市下水道科学館は麻生球場の近く



下水道科学館前から北方向の創成川の流れ

来た道、行く道。

様々な先達がいるからこそ
二十一世紀があるんだよ――
スローコミュニケーションを求めて。

本欄への自薦、他薦をお待ちしております。

体の続く限り――創業の地で守る老舗ガラス店の看板。

石輪英利さん――札幌市・石輪硝子店

こんなところにガラス屋さんがと、狸小路の通りすがりにのぞいた「石輪硝子店」。聞けば戦前の最盛期には、道央圏の大きな建物のガラス工事を一手に請け負っていたという老舗。創業の地で八十年以上の看板を守っているのは、三代目社長の石輪英利さん（六一）です。

英利さんにも定かではない同店の創業年。唯一残る古い社員総会議事録には昭和九年（一九三四）六月創立とありますが、「旧札幌グランドホテルを建てる時のガラス工事はすべて父（故・幸一郎さん）が手がけていますし、おそらく昭和九年以前からこの仕事に関わっていたはず」と英利さんは言います。

五階建ての同ホテルの開業は同九年十二月。創業してすぐの受注は考えられませんから、当然それ以前から相当の実績があったことになります。当時の五階建ての建物といえば数が少なく、技術者も多くはなかったでしょう。その盛業ぶりは近くに社宅が数か所あったほどでした。

転機が訪れたのは終戦を経て幸一郎さんの死（昭和二十四年）。代わって母親のミヨさん（平成十九年に百一歳で逝去）が切り盛りしましたが、かつてのような大型工事は思うように任せず、住宅のガラス工事などが増えていきました。そして英利さんが三代目を引き継ぐのが昭和四十二年。高校を卒業したばかりとはいえ小さいころから店を手伝っており、丸井今井など古い顧客も多い家業を守っていくことを決断したのです。

すでに半世紀近くが経過して業界の一番の様変わりは、町のガラス店の多くが姿を消したこと。英利さんが店を継いだ当時は、五十社以上が札幌硝子商組合に加盟していたのに、後継者がいないことなどから現在は二十社ほど。窓枠が木製からアルミ、プラスチックへと変わってガラス屋さんの出番も減り、屋根からの落雪で窓ガラスが割れることも少なくなりました。

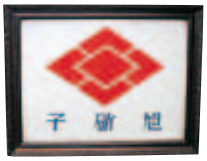
それでも並行してスーパーの玄関周りや、総ガラス張りのパチンコ店の内装、理美容院の鏡なども手がけてきましたし、場所柄、ススキノの飲食店の工事も。「最近は飲み方がおとなしくなったのか、酔客が窓を割ったなんていうこともなくなりました」と英利さんは笑います。時代を反映して経営者の交代が頻繁で、昔からのお客さんも減っているのが実情です。

「息子に跡継ぎを強いるほど魅力的な仕事ではない」とこちらも後継者難のようですが、「体の続く限り頑張る」と言う英利さん。厚さ六ミリのガラス板にすっとカッターを引き、音もなく切り分けて見せてくれました。

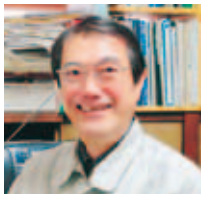
滑り止め付きの定規を当ててカッターを引く姿は昔も今も同じ

現在地と同じ場所にあった旧店舗（石輪さん提供）

上が鋼の付いたカッター
下がダイヤモンドカッター



株式会社 石輪硝子店
札幌市中央区南３条西５丁目
TEL(011)221-4016



刃先にダイヤモンドが

地下も含めて店内の至るところにガラス板が置いてある

上／円形に切るカッター　下／今も店舗は創業の地、狸小路そば。いかにも老舗のたたずまい

中島子供の国

親子で遊びに行った思い出。

子供を連れて、あるいは親に連れられて出かけた遊園地
「中島子供の国」に思い出のある人も多いでしょう
遊具がそっくり移転した円山動物園のキッドランドも昨年閉園
この種の遊び場が消えていくのも時代の流れでしょうか

今となっては遊具の名称もはっきりしないが
どれも当時の夢を乗せて動いていた（いずれも昭和60年前後）
（※上５枚は札幌市文化資料室所蔵）

隣接して野外音楽堂もありましたね

小はデパートの屋上から大は遊園地と名の付く公園まで、いつの時代も子供たちの人気の的だった遊具のそろった施設。メリーゴーランド、ジェットコースター、観覧車、コーヒーカップ――数え上げたらきりがありません。自分が、そしてわが子が小さかったころの思い出とともによみがえります。

札幌でいえばもちろん「中島子供の国」。昭和三十三年（一九五八）、中島公園内で開催された北海道大博覧会会場に設けられた遊具施設を翌年、札幌振興公社が引き継いで運営したのが始まりです。

時は「もはや戦後ではない」（昭和三十年経済白書）から四年後。日本は高度経済成長の入り口でした。博覧会場にお目見えした遊具にも、空中観覧車、豆自動車、人工衛星塔など、子供たちだけでなく大人にも夢を誘います。

初めは振興公社の遊具は八種類しかありませんでしたが、当時の都市公園内の遊園地としては国内唯一。宙返りロケットや、池の中に滑り落ちるウオーターシュートが人気でした。その後、同四十九年にはすべての遊具を更新・大改修し、「ボブスター」（小型ジェットコースター）を導入。さらに同五十七年には道内初の宙返りジェットコースター「ループ＆コーク」が登場しました。（以上「中央区歴史の散歩道」から）。

跡地はコンサートホール・キタラ

その四十九年のリニューアル後は、年間入場者が七十万人にも達した年もありましたが、徐々に減少。平均四十万人を維持しているところへ持ち上がったのが円山動物園への移設。跡地にはコンサートホール「キタラ」の建設です。平成六年のゴールデンウイークの営業を最後に、中島公園での三十六年の歴史を閉じました。

より家族連れで賑わうところで、「円山子供の国キッドランド」としての再デビュー。遊具と子供たちの出合う機会は増えたには違いありませんが、その円山動物園での営業も昨年九月末に閉園。中島公園時代から数えて五十一年。当初の小さな王様たちも還暦になろうとしています。なおキッドランド跡地は動物の飼育展示施設「アジア館」や「アフリカ館」になる計画です。

道具で道草30年

旅先で何気なく入った廃屋に置き去りにされていた裸婦画像
その美しさに呆然となった筆者は毎年そこへ通う
それを見るためにだけ、十年以上も――。

坂 一敬

廃墟のビーナス。

レトロスペースを開くべく日々苦闘していた頃、少しめどがついてきたので、ちょっと骨休めをしようと思い近場の温泉に出かけた。旅館について夕食まで三時間ほどあったので、周りを歩いてみようと思い、行きに一時間、帰りに一時間、戻って入浴に一時間、と頭の中で配分を決めあてもなく歩き出した。

一時間ほど歩いたのでそろそろ戻ろうと思った頃、左側に一軒の廃屋が目に入った。

二階建てで鍵もかかっていなかったので中に入ってみた。一階部分にはこれといった物は何も無い。当然といえば当然。二階へ上がる階段に足をかけ、体重を乗せてみた。まだしっかりしており登れそうなので上がってみた。すぐ右側の室には何も無い。廊下を伝って隣の室に入ってみた。

まず目についたのは、上半身を映せるぐらいの鏡のついた鏡台。ノリが剥がれて壊れてはいたけれど、引出しを抜いてみると総桐で、もとは中々の品だったろうと思われる。布のカバーの図から推して、持ち主はまだ若い人だったのかな――と思いながら、後ろに向きを変えた。壁に一枚のキャンバスが立て掛けてあった。大きさは八号ぐらい。機械張りではなく、手張りの中目。ひっくり返してみて、私は呆然となった。そこに描かれていた裸婦があまりにも美しかったから。

宿に戻ったのは六時を回っていたから、多分一時間以上油絵を眺めていたのだろう。夜、お風呂につかりながら、明日は早く起きて、またあそこに行ってみようときめていた。

翌日、五時に起きて一時間かけて廃屋に行き、時間の許す限り裸婦の油絵をながめていた。

冬、薪ストーブに燃える木の音を聞きながら、雪がとけてまだ草の生えそろわない頃、あの廃屋に行ってみようと思っていた。翌年の五月、私はまたあの絵の前に座っていた。驚いたことに、また、不思議なことに絵の中の彼女は昨年よりも美しさを増していた。陽が落ちるまで私はそこに座って眺めていた。それなりの準備をしてきていたので暗くなっても全然平気。絵の位置も彼女が一番良く見える処に置き換えた。

沈む夕陽の中に彼女を残し、暗くなった道をライトで照らして宿への道を帰る私の心はとても満ち足りていた。それからというもの私は最低でも年二回、私が「廃墟のビーナス」と名付けたあの油絵に会うため、例の廃屋に出かけるようになっていた。

気分が落ちこんでいる時でも例の絵を見ると心は晴れて行く。しかも不思議なことに昨年より今年、そして翌年と彼女は年を経るごとに美しさを増している。

どうしてなのだろう？

絵を持ち出そうかと考えたこともあった。場所は放棄された廃屋。紙の手提げ一枚でことは足りる。しかし、誰も見ていない、誰もとがめない、だからこそ、そんなことはすべきではない、という理性が勝り絵を動かすことは無かった。

ある年、今年は昨年より美しさが増しているだろう、美しさはどこまで増すのだろうと思って眺めた絵が、昨年より幾分落ちているように見えた、気のせいかとも思った。翌年、絵はさらに美しさを減じていた。もはや、気のせいではない、絵に何らかの変化が起こっているに違いない。

そうか！　太陽の光によるファンデーションをかけていない絵の具の退色、埃と微生物、窓ガラスが破れているので絶えず吹きこむ風、そういった全ての自然がこの絵にある種のくすみと色あいを与え、人が描いた以上のものを作り出していたのだと。

ダビンチのモナリザもアングルの泉も、その他、多くの美しいと言われる絵をこの目で見て歩いたけれど、こんな色合いの絵は無かった。しかし時の経過と自然の力はある時を頂点に、破壊の方へ舵を切っていったのだろう。

数年間を置いて廃屋を訪れてみた。階段も劣化が進み登るのもヤバイ。室に入ってみると、そこに一枚の平凡な裸婦の油絵があった。私は絵を最初にあった処に戻し室を後にした。

私を十年以上に渡り、励まし慰め支えてくれた「廃墟のビーナス」に「サヨウナラ」を言って。今夜、宿にあったモロッコ椅子に腰掛けて、久々に飲む酒とタバコはきっとやるせない味がすると思いながら。

親交のあった宮田画伯が筆者の話をもとに描いた裸婦の顔

文中で筆者が泊まった宿にあったモロッコ椅子

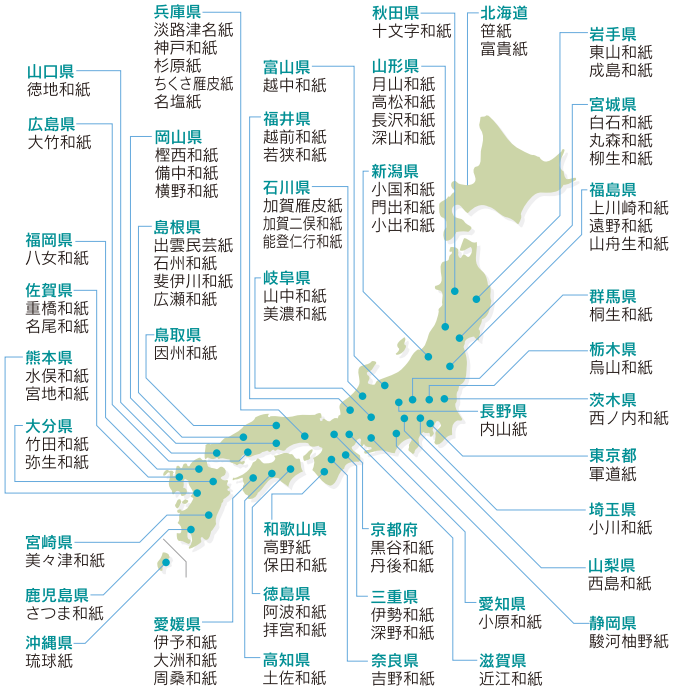
レトロスペース坂会館・館長（坂栄養食品・開発部長）

紙の話 2 最近、和紙に触れましたか。

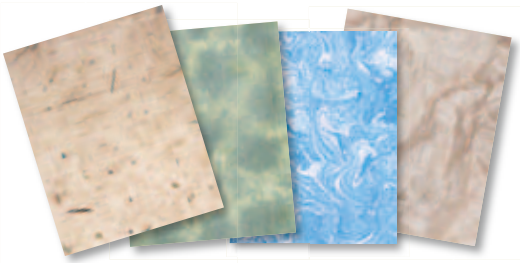
新聞やチラシを初めとして、日常的に手に触れる紙はほとんどが洋紙。
書道の半紙や障子紙、千代紙といった和紙はもはや接する機会は少なく、
紙幣でさえ和紙から作られていることを忘れています。
安価であることからでしか洋紙を選んでいない一面もあるのですが。

ふるさとの和紙

使われなくなった、見かけなくなったといわれても、全国にこれだけの和紙。求めてみればお国柄もわかるかもしれません。



和紙の原料と製品



【楮】(こうぞ)――日本で一番多く栽培されている原料。奉書紙・障子紙・傘紙・書画用紙・版画用紙・提灯紙など

【三椏】(みつまた)――お札はすべてこれ。枝の先が三つに分かれている。紙幣・写経用紙・証券用紙・箔[※1]合紙(はくあいし)など

【雁皮】(がんぴ)――栽培できないので野生のものを使う。鳥の子紙・日本画用紙・版画用紙・箔[※2]打ち紙・ふすま紙など

和紙の製法

木の皮を剥ぐ → 煮て漂白 → 叩いてほぐす → 原料・水・ネリ[※3]を混ぜて漉き舟で縦横に揺らす → 一枚一枚漉いていく → 漉いた紙を圧搾 → 木の板に張って乾燥させる

※1　金箔をはさんで保存する　※2　金箔をはさんで薄くたたきのばす　※3　粘りのある液体。トロロアオイの根から取る　参考／全国手すすき和紙連合会・和紙の博物館HP

本づくり質問箱

本づくりの「?」にお答えします。
お気軽に質問をお寄せください。

Q どうにか原稿を仕上げて、使う写真や資料もそろいました。すぐにでも印刷会社に連絡して全部渡してしまいたいところですが、あとはすべておまかせでよいのでしょうか。

原稿はプロに見てもらうこと

A 自分の本だから何を書こうと自由、好きに書いてよいと思われがちですが、実はそうではありません。本を書く、出版するということは、とりもなおさず人に読んでもらうということです。たとえ読者が身内であろうと、また友人、職域の人であろうと、つまらない内容、読むに堪えない文章では、手にとってもらうことさえ覚束ないでしょう。これでは本を出す意味がありません。

自分の文章で構成したい気持ちはよくわかりますが、日ごろ書きなれてない人のものは、主語・述語、起承転結のはっきりしないものも多いことがよくあります。そこで印刷会社に頼むときには、経験のある編集者がスタッフにいるかどうかを確認して、文章や全体の構成、資料や写真の過不足のチェックも頼むことが肝心です。

印刷会社は、受け取った原稿の「てにおは」がおかしかったり、内容が"自分だけ史"や"自慢話"に終始していても、普通はそのまま組版に入るだけですから、編集者という第三者の目を通すことによって、よりグレードアップした内容になるはずです。

●出前でアドバイスを

自分史など本をつくりたいと考えている人のために、印刷担当者と編集者がお伺いしてアドバイスいたします。グループでもどうぞ。お気軽にお申し込みください。

●記念誌で歴史を残す

企業や団体が二十年、三十年と歴史を重ねていくうちに、人が変わったり資料が散逸したりします。節目の年に記念誌の制作はいかがですか。企画、編集、印刷、どの段階からでもご用命を承ります。

●小紙をお送りします

慌しい毎日に、ほっと一息つける話題を提供していきたいと願っている小紙です。ご希望の方に無料でお送りしています。印刷紙工までお申し込みください。